

どどど企画第二十三回公演台本

どどど企画の
読書する女

作・演出 萬野 展（押田鉄生名義）

登場人物

安田健太（A） ハッカー。

安田健太（B） 印刷工。

松本 アルバイト学生。

当麻理絵子 とうま 大学研究助手。

目木和也 大学院生。

日浦節子 助教授。

飛田林晴彦 とんだはやし 学部長。

飛田林富美夫 大学生。学部長の息子。

高林千鶴子 SMクラブのホステス。

高林さなえ 中学生。千鶴子の娘。

黒崎彦一 右翼系フィクサー。

伊藤裕美 ヤクザ。黒崎の懐刀。

坂上千満 ちま 老婆。

葬儀屋

読書する女

【注記】当脚本は一九九一年どどど企画によって、タイニイアリスにて上演された。著作権は萬野展が保持する。当脚本の無断上演を禁ずる。

プロローグ〜ACT1

学生風の男の子が電話ボックスで電話している。

学生 もしもし！ あ、俺だよ。あのさ、これからバイトなんだ。うん。急に決まったんだけど、金がよさそつだからちよつと休んでくるよ。…怒んなよ、終わったらすぐ行くって。うん、なんかよくわかんないけど、すごいんだよ（バイト雑誌を見て）、「求む軽作業員、日給一万、実働五分、交通費全支給、秘密厳守…」え？なに？ うさんくさい？…そうかなあ。だってもう電話しちゃったもんよ、これから行きますって。なに言ってんだよ五分で一万だよ、一万。どんなって…そりゃ軽作業だよ。軽い作業だろ。うん、まあとにかく行ってくるわ。平気だよ、ヤバそつだったら帰ってきちゃうから。じゃな。

学生、ボックスを出る。雨音。

学生 …ちえ、降ってきやがった。

学生駆け出し、退場。強まる雨音。遠く雷鳴。暗転。

近い雷鳴とともに明かりが入る。部屋、三十過ぎくらいの男（安田健太A）がいる。部屋には椅子、テーブルの上には水のはいつたグラスが二つ載っている。外は雨。ときおり雷鳴を伴い、しだいに強くなっていく。安田A、アナログレコードをかける。荘厳なメロディが流れる。時間を気にする安田A。誰かを待っている様子。激しい雷鳴、稲妻。部屋の明かりが不安定に瞬く。もうひとりの男（安田健太B）登場。

安田A 遅かったじゃないか。

安田B すまん、少々手間取った。

安田A 肝心のものは手に入ったのか。

安田B ああ。

安田A ヤバくないのか。

安田B ああ。足はつかない。

安田A 条件には合ってるんだろつな。

安田B 安田。

安田A なんだ。

安田B ちよつと休ませてくれ。

安田B、椅子に座る。

安田A ひでえ雨だな。

安田B ああ。…これなんだ？

安田A ん？

安田A 気づいて曲名を答える。

安田B …いい曲だな。

安田 A ああ。

安田 B、コートのポケットから棄らしきものを取り出しテーブルの上に置く。

安田 B 無味無臭で完全に水溶する。いったん溶けたら見た目でも匂いでも判別はでき

ない。致死量は〇・〇七ミリグラム。耳掻き一杯で百人殺せる。

安田 A 確実に死ぬんだろうな。

安田 B 確認した。

安田 A …。

安田 B 俺んちの裏に一人暮らしの婆さんが住んでるの知ってるだろ。

安田 A …ああ、庭にナンテンの木のある…

安田 B や、ありゃクチナシだよ。

安田 A クチナシか、あれ。

安田 B うん。

安田 A …や、ナンテンもあつた。便所のそばに。

安田 B うん、あつたな。

安田 A あつたよ。

安田 B うん。その婆さんがさ、猫飼ってたんだ。

安田 A うん。

安田 B うん。それでさ、お前の娘、猫飼いたいって言ってんだろ。

安田 A ああ、言ってたな。

安田 B あの猫、今度連れてきてやるよ。

安田 A いいのか。

安田 B うん。飼い主、もつけないから。

安田 A ……そつか。

雷鳴。

安田 B ……どうしても、やるんだな。

安田 A おじけづいたか。

安田 B このままでいいと思わないか。

安田 A このまま俺もおまえも破壊するのさ。それを手を拱こまねいて見ているつもりか。俺達にはそれぞれ死守するべきホームベースがある。十四年前とは違うんだ。どつちかが死ねば残りは助かる。それしか方法はない。

安田 B …。

安田 A 安田。

安田 B ん。

安田 A その猫、日本猫か。

安田 B うーん。そつだと思っけど。

安田 A 娘な、なんかアメリカンなんかかってのがいいって言ってんだ。

安田 B そつか。……あんまりアメリカって感じはしないな。

安田 A そつか。

安田 B ま、それでもよければ、さ。

安田 A お前が生き残るとは限らないぜ。

安田 B そしたらお前が行って連れてくりゃいいぜ。いつも濡れ縁のところで寝てるから。

安田 A 生き残ったほうがお互いの家族の面倒を見る。そつだな？
安田 B ああ。

安田 A じゃ始めるか。ルールは決めた通りだな。
安田 B そつだ。どつちが死んでも、恨みっこなしだ。

安田 A、テーブルに背を向ける。
安田 B、テーブルに近づき、Aがこちらを見ていないことを確かめ、一方の水に薬をあける。
音もなく溶ける薬。

安田 B もついいよ。

安田 A ん。

安田 A、振り返りテーブルに近づく。

安田 B、入れ替わりに下がって様子を見守る。

安田 A、じっとふたつのコップを見詰める。

やおら一方のコップに手を伸ばす。

安田 B アウ。

と、妙な音をたてる。
思わず手を止める安田 A。

安田 A …。

安田 B …。

別のコップに手を伸ばすA。

安田 B アアウ。

安田 A …。

安田 A、じっとコップを見比べている。

安田 A ホントに入れたんだらうな…。

安田 B どつちだよ。

安田 A せかすなよ。命がかかってんだ。

安田 A、匂いを嗅いだりいろんな角度から眺めたりしている。

安田 B コップに触ってないから指紋を見ても無駄だよ。

安田 A …。

安田 B ま、夜は長いんだ。じっくり選んでもらいましょう。

安田 A 気楽そうに言いやがって…。俺が選んだら飲むのは同時だからな。わかってるだろうな。その時になって泣き言言つなよ。

安田 B わかっているとと思うけどお手つき無しだからな。コップにちょっとでも触ったら待ったなしだぞ。

安田 A、再びコップにじりじりと手を当て、フレイントをかけておつと別のコップへ。

安田 B アウ。

安田 A、その声でまた別のコップにチェンジ。

安田 B オウ。

ふたり、荒い息。

安田 A お前がそれをやるから決心が鈍るんだろうが！

安田 B こっちだって必死なんだよ。

安田 A くそ、最初に一気に行くべきだった。

安田 B …かもな。

安田 A こんなもの、考えたってわかるもんじゃないしな。よし、この曲が終わったときが勝負だ。

安田 B はあ？

安田 A この曲が途切れた瞬間、問答無用でどちらかを選ぶ。

安田 B 焦るなよ。納得いくまで選べよ。

安田 A 納得もなにもこんなもん所詮カンなんだよ！

安田 B 落ち着けよ、後で後悔したくないだろ。

安田 A 即死なんだろ！ 死んだら後悔もクソもあるか。

安田 B 本気なんだな。

安田 A 男は度胸だ。イツパツ決めちやる。

と安田が言ったとたんに交響楽が終わる。
ふたり、しばし沈黙。

安田 A 第一楽章…

安田 B (同時に) B面…

同時に言いかけたとたんに音楽が再開する。
大息をつくふたり。

安田 A 第四楽章まであるんだ、これ。

安田 B いい曲だ。

安田 A …おい。

安田 B なんだ。

安田 A どっちに入れた。

安田 B …。

安田 A 俺はもう右か左か選んだ。選んだからそれはもう決して変えないからどっちに入れたか教えてくれ。

安田 B 悪あがきはよせ！ さっさと選べ。

安田 A いいんだな。

安田 B なにが。

安田 A 選んじゃうぞ。

安田 B だから選べよ。

安田 A 安田。

安田 B なんだよ。

安田 A いいか、仮に、仮にだ。仮に俺がもし毒の入っていないほうを選んだとして、お前は自分の自分の気持ちを考えてことがあるか。よく考えてみる。俺がどちらかを選ぶ。さあ選んだ。お前はそれを見る。テーブルの上に残されたのはお前の息の根を確実に止める液体だ。その時点でお前はすでに死神にはがいじめにされている。口元に引きつった微笑みを浮かべてそれを手にとる。乾杯。カチリ。グラスが鳴る。人生最後の乾杯だ。カチリ。カチカチ。カチカチカチ…。この音は？ 違う、グラスの音じゃない。お前の歯がなる音だ。歯の根が合わない。噛み締めてもとまらない。それを見て俺は思う。ああこっちにしておかた。神様ありがとう…

安田 B いいから早く選べよ！

安田 A …。いくぞ。

安田 A、グラスに手を伸ばす。

安田 B ウオアウ。

安田 A …てめえは選んでほしいのか邪魔したいのかどっちなんだ！

安田 B いやあ、どっちと言われても。

安田 A 鈍るんだよ、決意が。

安田 B 気にしないで決意を貫けばいいだろ。

安田 A 気になるんだよ、黙って見てられないのか、お前は。

安田 B 黙ってるよ。

安田 A、グラスに手を伸ばす。
B、百面相のようなことを始める。

安田 A …。

安田 A、気になってしかたがない。
安田 B、体を使って「なにか」を表現している。

安田 A …なんだよそれは。

安田 B え。いや。

安田 A 気になるんだよ！

安田 B 度胸ないな、おまえも。

安田 A 誰のせいだと思ってるんだよ！

安田 B 落ち着けよ。焦ったってしかたないだろ。ま座れって。

安田 A これじゃ一晩かかったって決着つかねえじゃねえか。

安田 B そうかもな。

安田 A だいたいお前だけがどっちに毒が入ってるか知ってるってところに問題があるんじゃないか。

安田 B 誰かが入れなきゃしょうがないじゃないか。

安田 A ルールがまずかったかな…。

安田 B 実はな、こついうこともあるつかと思って、前もって募集しておいたんだ。

安田 A ん？ なにを。

安田 B (時計を見る) そろそろ来るころだ。

学生、登場。

学生 あのー、アルバイトニユース見てきたんですけど…。
安田 A …。

学生 あの、ヤスダさんは…。

安田 B やあ、待ってたよ。入って入って。私が安田だ。

安田 A おい。

安田 B いいからいいから。松本くんだったね。

学生（松本） はい、松本です。

安田 B こちらはこの別荘のオーナーの安田さんだ。バイトの松本くん。

安田 A …どうも。

松本 よろしくお願ひします。

安田 A こちらこそ。

安田 B じゃ、さっそく頼むよ。

松本 あの、なにをすればいいんですか。

安田 B 簡単なことだ。ここにコップがふたつあるだろ。

松本 あ、はい。

安田 B このコップをだね、私たちが後ろを向いている隙に、こっ、ね、して欲しいんだ。

松本 はあ？

安田 B だから、こっ、ませこせにしてどっちがどっちかわらなくて欲しいんだよ。わかるだろ。

松本 はあ。

安田 B じゃ、さっそくやってくれ。

安田 A・B、後ろを向く。

松本 あの。

安田 B ん。

松本 もうやっていいんですか。

安田 B やってくれ。思う存分やってくれ。

松本 はあ。じゃ、遠慮なく。

松本、ガラスの位置を何回か入れ替える。

雷鳴が轟き、部屋の照明が瞬く。

稲妻が窓際の安田たちのシルエットを一瞬浮かび上がらせる。

松本 …あの。

安田 B ん。

松本 やりました。

ふたり振り返る。

松本 あの、それから次はなにか。

安田 A これだけだ、ご苦労さん。

安田 B （ポケットから札入れを出し）約束のバイト代だ。もう帰っていいよ。

松本 …はい。じゃあ、あの、失礼します。…あの、こっ、いつのまたありましたらよろしくお願ひします。

安田 B …お疲れさん。

松本、退場
にらみ合う安田 A、B。

安田 A まっすぐ歩いて近いほうだ。

安田 B よかろう。

ふたり、まっすぐにテーブルに歩み寄って、同時にそれぞれグラスを取り上げる。

安田 A …乾杯。

カチリとグラスが鳴る。飲み干す。
雷鳴。暗転。

ACT 2

大学研究室。
若い女性の助手（当麻）、その後ろから男（目木）、登場。

当麻 だから言ってるでしょう。これそっちのミスです。
目木 いやあ、だけどそんなはずないんですよ。これだけ徹底的にチェックしたんですから。

当麻 徹底的徹底的って現にこうやってありえないデータ出てきちゃってるんです。

目木 入力データの方に問題があるんじゃないんですかあ。

当麻 いいえ。それももうチェックしたの。

目木 徹底的に？

当麻 そう、徹底的に。

目木 うーん、けどなあ。どう考えてもプログラムにミスはないんですよ。

当麻 コンピューターおかしんじゃないの、それじゃ。

目木 それはいいですよ。大学のセンターマシン使ってるんですから。

当麻 じゃ結論は明らかですよ。あなたのとこで作っていただいて徹底的にチェックしていただいたプログラムが決定的におかしいのよ！

目木 困ったなあ。

当麻 困ったのはこっちよ。このデータ今週中に揃わないと先生の論文に間に合わないよ。それなのに毎回毎回バラバラな結果が出てくるってどついついことなの。

目木 そこがなんともおかしいんですよ。コンピュータってのは教えられたことを教えられた通りにしかやりません。だから入力したデータが同じなら出てくる答えは同じはずなんです。仮に、万が一プログラムにバグがあったとしても、間違い方は一定してるはずで、一足す一は必ず二になるんです。

当麻 そんなこと私だってわかってます。だからその教え方が悪いのよ。足すはずのものを掛けたり割ったりしてるんじゃないの。

目木 でもそれは徹底的に……いや、とにかく間違いなく動くはずのプログラムなんです。とすれば入力に問題があるか、あるいは……

当麻 なによ。

目木 誰かがこつそり掛けたり割ったりしてるってことですが。

当麻 誰よ。こびと？ 夜中にこつそり忍び込んできて？

目木 そうですね、ま、ハッカーっていうんですけど、普通は。

当麻 馬鹿言わないで。大学のセンターマシン使ってるって言ったのあなたよ。ここのホストに入り込んでるやつがいるっていろいろ。

目木 そうですよ。ホストコンピュータ使ってるのは僕らだけじゃないし、そんなことがあつたら大問題ですよ。大学で使ってるデータが全部筒抜けになってるってことですからね。

当麻 まさか。

二十代と思われる女性（日浦助教）登場。

日浦 おはよう。

目木と当麻、呆然と顔を見合わせている。

目木 それは…ひよつとしてただの偶然では…

日浦 その規則で作った文章がそのウラに…そう、そこにメモしたわ。

当麻、用紙をひっくりかえして読む。

当麻 :「ぼくがクレイにエサをやる ぜろからきゆう えいからぜつと クレイはぜつとおきにいり しっぽにはさんで とくいがお やすだ けんた」…先生、これ…!

日浦 偶然かしら。

当麻 偶然のわけないわ、これが偶然だったら…

目木 飛行機が空飛ぶのも偶然でしょうね…。

当麻 ヤスタ・ケンタ…

目木 それがハッカーの名前ですか。またあつけらかんとか乗ってきましたね。

当麻 けどZがお気に入りってなんのことよ。

目木 「クレイ」の「C・R・A・Y」の尻尾、つまり最後の「Y」の前に「Z」をさむ…と。

目木、用紙のウラに殴り書きする。

当麻 「クレイジー」…。

目木 クレイに侵入してコンピュータを狂わしてやるって言うてるんですよ、こいつは…えらい騒ぎになるぞ、これ…。

当麻 先生！ どうすねば…

日浦 こういう風にひらがなを数字に置き換えるプログラムって作るのは大変なの？

目木 簡単です。原理がわかればまったく簡単です。

日浦 じゃあお願いするわ。それでこっちの仕事の邪魔しないように頼んでみるから。この「ヤスタ」ってひとに。

当麻 あ、先生！

日浦 私、事務室で寝てるわ。なんかあつたら起こして。

日浦、退場。

目木 ぼんやり眺めてて気づいたって…？ どういう人なんだ…。

当麻 だから言ったでしょ、うちの先生は天才だって。彼女は必ず教授になるわ。今度の論文チャンスなの。ハッカーだかシロッカーだか知らないけど、邪魔されてたまるもんですか。そういうわけで頼んだわよ。

目木 は？

当麻 あなたなに聞いてたのよ。これの返事を書くプログラムよ。

目木 そりゃいいですけど、いや、だけどいいのかなあ。

当麻 なにがよ。

目木 だって、もしこれが本当にハッカーの仕業なら、しかるべき筋に報告して手を打たないとまずいんじゃないのかなあ。

当麻 しかるべき筋ってなによ。

目木 マシンの管理責任者は、たしか工学部の学部長あたりでしょ。

当麻 そつするどつなるの。

目木 さあ。まあ普通は徹底的に調査の手が入ることになるんじゃないですか。そうなりや当分われわれみたいなプライベートユーザは使用禁止ってことになるんでしょうけど。

当麻 ダメよ！ それはダメ。絶対ダメ。報告するならうちのデータ処理が終わってからにして。

目木 こりやまた身勝手なことをキッパリと。

当麻 発表遅らすわけにはいかないもの。お願い。まだ報告しないで。このとおり女が頭下げる。

目木 …わかりましたよ。で、いつまでに作ればいいんですか。

当麻 明日の朝イチで持ってきて。

目木 ちよつと待つてくださいいよ。今日は研究室、誰も出て来てないんですよ。

当麻 あなたがいるでしょ。

目木 まいったな、私これから家庭教師のバイトが…。

当麻 わかったわよ！ 別料金出すわ。

目木 …無料奉仕させるつもりだったんですか。

当麻 なに言ってるのよ、そもそもあなたとこのプログラムがちゃんと動かないからこんなことになったんでしょが。

目木 そんな無茶な。

当麻 なにが無茶よ。だから別に払うって言うってんでしょ。

目木 …いくら。

当麻 ま、ネゴしましょ。ご飯、食べる？

目木 …（諦めて）いきましょ。

当麻、目木、退場。

ACT 3

待合室。

学生風の男（飛田林）が椅子に座っている。

安田健太（B）、登場。男の隣に座る。

安田 B （ふととなりの男の顔を見て）…あれ。

飛田林 …。

安田 B あれえ。

飛田林 …。（不安そうに相手を見る）

安田 B …。（相手をまじまじとみて、やっぱりという顔をして、自分の顔を指差す）

飛田林 …。

安田 B 俺、俺。

飛田林 なんですか。

安田 B あ、その声、やっぱりそうだ。俺だよ、俺。覚えてない？

飛田林 誰ですか。

安田 B 俺だって、俺。

飛田林 悪いんだけど、思い出せないんだけど…。

安田 B あ、その言い方。いやー、なつかしいなあ。おまえ今なにしてたんだよ、俺さ、高校ん時こつちでてきて、そのままこつちに就職しちゃってさ、今じゃサラリーマンだよ。まさラリーマンたって大したことないんだけどさ。ちっちゃな印刷会社でさ、毎日インクにまみれてるよ。最初はいつた時はさ、インクのおいが鼻についてさあ、なんかメシくつても自分がインク臭いような気がしてしかたなくてさ、やだつたよー。でもさ、慣れなんだよな。もう二月もしたら全然、気になんなくなつてさ、人間てホント慣れるよなー。おまえそついつこつことない？

飛田林 …誰？

安田 B 変んねえな、おまえ。

飛田林 人違いじゃないかな。

安田 B なに言ってるんだよ、飛田林だろ。な？（相手うなづく）ホラ。トビリン。トビリン、今何してんだよ。大学か？ そうだな、そのナリは大学生だよな。おまえ頭よかつたもんなー。そーそー、そつえばおまえ、おやじが大学教授だったけなあ。いやあ、懐かしいなあ。

飛田林 誰なんだよ、なまえ言えよ名前。

安田 B わかんない？

飛田林 わかんないよ。

安田 B うそ。マジでわかんないの？

飛田林 うん。

安田 B うそ。

飛田林 嘘じゃないよ。

安田 B オレ、そんなにかわつたかなあ。ホントは分かつてトボケてんだろ。コラ。

トビ。えー？ コラ。

飛田林 とほけてないよ。名前言えって。

安田 B じゃ、ヒントね。

飛田林 ヒントじゃなくて名前言ってくれよ。
 安田 B いいから聞けよヒント。一発で分かるから。
 飛田林 …。
 安田 B 「小学校」「給食」「あげちくわ」。
 飛田林 … 健太？
 安田 B ピンポン。
 飛田林 安田健太か、おまえ。
 安田 B そうだよ。
 飛田林 久しぶりだなー！
 安田 B 思い出したか。小学校3年の時隣りに座ったろ。
 飛田林 そうそう、あの後一度も同じクラスになんなかったもんなあ。
 安田 B … バカ、なったよ、五年とき一度。
 飛田林 うそ。
 安田 B なった。
 飛田林 なってないよ。
 安田 B なったって！
 飛田林 五年とき？ うそだあ。
 安田 B うそじゃねえよ。じゃ何組だ、おまえ、五年は。
 飛田林 五年は、三組かな。そう三組だよ。
 安田 B だろ。俺も三組だもん。担任堀川だろ。
 飛田林 おーおー、堀川、堀川。俺、4、5と続けて堀川だったんだ。
 安田 B うそ、ヒサンだなー、それ。
 飛田林 ヒサンだった。
 安田 B 堀川ってば、あれだ。背中の中傷。(笑)
 飛田林 あ、なつかしー！(笑)
 安田 B 見せるんだよなー、あれを。(笑)
 飛田林 朝礼で。(笑)
 安田 B 朝礼で。何考えてんだか。それでそれがどういいうわけか毎回毎回拍手喝采。(笑)
 飛田林 そーそーそー、そーだった。(笑)
 安田 B も、全然わけわかんないよなー。(笑)
 飛田林 だけとおまえよくおぼえてたなあ。
 安田 B なにが。
 飛田林 あげちくわ。
 安田 B バカ、ありゃショックだったんだぜ。オレあげちくわ一番好きだったんだから。(怒)
 飛田林 ありゃおまえがさきに俺のハツサクとったんじゃないか。(怒)
 安田 B ハツサクくらいいいじゃないかよ。(怒)
 飛田林 ハツサク好きだったんだよ、俺は。(怒)
 安田 B おまえ残してたじゃんか。(怒)
 飛田林 最後の楽しみにとっといたんだよ。俺が食器戻してる間に食っちゃいやがって。(怒)
 安田 B ばかやる、俺なんかあのあと泣いちゃったんだぜ。
 飛田林 俺なんかあのあとショックで体育見学したんだぜ。…バカだよな。

安田 B 懐かしいな…。あのころはさ。
飛田林 うん。

安田 B あれからもう、…十年か！
飛田林 そうだよな。

安田 B こっち出てきてから、小学校んときの奴なんて一回も会わないよ。
飛田林 ほとんど地元で就職だからな。

安田 B それがこんな、SMクラグの待合室で、バツタリ会うなんてなあ。

突如としてあやしげな音楽が流れ出す。
黙り込むふたり。

安田 B おまえさ…どっちなんだよ。

飛田林 ん？

安田 B こっち（S）かよ。

飛田林 …うん。実はそうなんだ。

安田 B そつか。俺はさ、こっち（M）なんだ。

飛田林 ここ、常連なのか。

安田 B （うなづく）給料の半分…三分の二…五分の四…はここだな。

飛田林 そんなにかよ。

安田 B この頃じゃさ、会社で給料であるだろ、このマネージャーに袋ごと渡すんだ。
で、月末に差額を返してもらうんだよ。

飛田林 ホントかよ。

安田 B ううん、ウソ。

飛田林 バカヤロ。

安田 B …俺さ、ほんと地元で就職決まってたんだ。親のコネで結構条件もよくてさ。けどどうしてもこっち残りたかったんだよ。

飛田林 なんて。

安田 B ここにエミリーっていう女王様がいるんだけどさ…。

飛田林 うん。

安田 B ま、惚れちゃったんだな、早い話。

飛田林 …。

安田 B どうしても離れたくなくてさ。高校卒業して、もうなんでもどこでもいいからこっちに就職して、いつか一緒になれたらいいな…なんて。

飛田林 おまえ高校のときからこんなトコきてんのかよ。

安田 B こんなトコってなんだよ。

飛田林 ああ…。

安田 B 自分のこと考えろよ。

飛田林 そりゃそうだよ。そうだけど、なに？ 一緒になるって結婚すんのか？

安田 B したいな…って。

飛田林 へえ…。それで、もう申し込んだのか。

安田 B 馬鹿いえよ、オマエ、相手は女王様だぞ。身分が違うだろ。

飛田林 …なんか…おまえも大変だな。

安田 B まあな。

突然、女の悲鳴。顔を見合わせるふたり。
立ち上がる。
女王スタイルの女(高林千鶴子)がよろめきながら登場。

安田 B エミリー女王様! ど、どうしたんです。

千鶴子 ああ…安田くん…お客さん…が…

安田 B お客って…

千鶴子 救急車…救急車呼んで…

安田 B きゅ、きゅうきゅうしゃというと…百十番…いや百十九番か…

千鶴子 (イライラして) ええい…早くおし! (ムチを鳴らす)

安田 B は、はいッ。

安田 B、あわをくって退場。

飛田林 …あの、いったいなにが…

千鶴子 お客さんが…

飛田林 …ハイ。

千鶴子 死んじゃった、みたい。

飛田林 …。はあ…。

サイレンの音。安田 B の声。

安田 B 女王様あ。救急車が参りましたあ。

ふたり、退場。

大学構内。

作業服の男(安田 A)、登場。

目木、当麻、登場。

目木 じゃあちよつと荷物とってきますから。

目木、退場。

安田 A、後ろを向いて目木をやりすごす。

安田 A、去りかけて当麻と鉢合せする。

安田 A …。

当麻 …。あの、なにか?

安田 A …。あ。

当麻 …。この研究室に御用でも。

安田 A …。あ…。や。

当麻 …。もう閉めちゃいますよ、きょうは。

安田 A …。

当麻 …。

当田 A …。あ、で、電気。

当麻 は?

安田 A や、…その…電気の…。

目木、登場。

目木 どうもおまたせ。

安田 A、その隙に逃げるように退場。

当麻 あ、ちょっと…。

目木 どうしたんですか。

当麻 なんか電気がどうのって…。

目木 電気の検針かなんかじゃないですか。隣が配電室だから。

当麻 …。(首をかしげている)

目木 なんですか。

当麻 あたし…あの人、どこかで見たことある。

目木 へえ。

当麻 思い出せないな。どこだったんだろ。

目木 そりゃ構内に入りに入っている業者ならどこかで見てるんじゃないですか…。

当麻 …。

目木 それよりメシ、どうするんですか。

当麻 …食べるわよ。

ふたり退場。

別の場所。夕暮れの公園。

安田 B、飛田林、登場。

飛田林 死んだの、ヤクザだったんだって？

安田 B …ああ。根小田っていう、常連の客で、コレ(麻薬)の取り引き専門のやつだったらしい。

飛田林 コレって…

安田 B クスリだよ。自分でもヤツってたらしいな。

飛田林 それでココ(頭)にきたのかもな。

安田 B …ああ。

飛田林 ま、そう気落ちすんなよ。彼女が殺したわけじゃないんだし。事情聴取だけですぐ釈放されたんだろ。

安田 B …ああ。

飛田林 ムチ打ちブレイやってて、死ぬ死ぬとか言ってるうちにホントに卒中で死んでしまったんだから…。

安田 B 考え様によっちゃ…いい死に方、だよな。

飛田林 …なんともコメントのしようがないな…。

安田 B あ、俺、ここの古本屋の二階に下宿してんだ。

飛田林 ああ。

安田 B また、そのうちな…。

飛田林 ああ、じゃあな。

安田 B (いきかけた飛田林を呼び止める)トビ。

飛田林 ん。

安田 B おまえに今度頼みたいことがあるんだ。

飛田林 なんだよ。

安田 B うん…彼女が落ち着いたら、俺、結婚申し込もうと思って…

飛田林 直訴すんのか。

安田 B 段取りしてくれよ。

飛田林 俺が？

安田 B 最初の一言が言いづらんだよ。誘ってくれるだけでいいんだ。

飛田林 俺がかよ…。

安田 B 頼む。

飛田林 まあ、そりゃ…

安田 B 頼むよ。ハッサクのことにはあやまるから。このとおり。(頭を下げる)

飛田林 わかったよ。やってやるよ。なんたって俺とお前は…

安田 B (顔をあげて) ちくわの友。

飛田林 先に言うな。

夕暮れの中、ふたりの旧友は手を振って別れる。
退場。

同じ夕暮れ。研究室。

日浦助教、登場。

酒を飲み始める。

飛田林学部長、登場。

学部長 よつ。飲^やってるね。

日浦 やってないわよ。なんにも。

学部長 相変わらずだね。

日浦 相変わらずですよ。

学部長 酒は？

日浦 あるわ、飲む？

学部長 愚問だな。

日浦、酒を作って渡す。

日浦 息子さんは幾つになった？ 元氣？

学部長 今年大学だ。元氣かどうかはよくわからん。

日浦 こと？

学部長 (首を振って) 親孝行な息子だね。親の負担を考えて国立にもぐりこんでくれたよ。(ちょっと照れたように) 一期校だ。

日浦 そう。

学部長 親の血は引かなかったと見えてどうも文系の方だね。やつこさん政治家志望らしいんだよ。俺の息子にしちゃ信じられない程の出来さ。

日浦 奥さんのしつけがいいのよ。

学部長 そうらしい。…なにがおかしい？

日浦 あなたがそんなふうの子供の自慢話をするなんて考えもしなかったから。

学部長 そうかね。俺だってこれでも家庭的なところは持つてるつもりなんだがね。

日浦 あなたがまだ教授だった頃はね、私たちが助手仲間では、先生が学部長に昇進するのが先か、それともアル中で昇天するのが先かって、本気でカケをしたものよ。

学部長 ふん。近頃じゃ君の助手どもが同じ賭を君を対象にやってるらしいがね。

日浦 私は助教授よ。

学部長 この大学じゃ、女が教授になるのは、男が学部長になると同じくらい快挙さ。それももう目と鼻の先だ。

日浦 あなたには感謝してるわ。あなたの推薦がなかったらここまでこれなかった。

学部長 君がここまでできたのは君の実力さ。俺はなにもしちゃいない。…飲み過ぎてるぜ。

日浦 …そうね、もうよすわ。

学部長 率直に言っ君は働きすぎだよ。それも酒とタバコで体をいじめながら。長年の忠告も、時々は思い出してもらいたいな。

日浦 …人間ドック入って、徹底的に診てもらえっというんでしょ。

学部長 そんな飲み方を毎日してたんじゃ、賭にならんぞ。

日浦 …。

学部長 君は変わらないな。

日浦 病院にいたこと…？

学部長 …。

日浦、眩しげに夕日を見やる。

日浦 病院にいた頃も、こうやって夕日を見てたわ。ひとり。毎日、毎日。

学部長 …。

日浦 あなたはその頃主任教授になったばかりで…飛ぶ鳥を落とす勢いだっただわね。

学部長 飛ぶ鳥が落ちる勢いで墮落してたってだけさ。

日浦 あなたが私をあそこから救い出してくれた。でも…今でもときどき思うわ。私
はあそこで終わっていてもよかった…。いいえ…あそこで終わってしまうべき
だった…。

学部長 …。

日浦 飛田林学部長。

学部長 なんだい。日浦助教授。

日浦 あなたは、まだ…わたしが狂ってると思ってる？

学部長 …いや。君は正気だ。俺が正気なのと同じように。

日浦 …。

学部長 邪魔したね。

学部長、退場。
暗転。

ACT 4

大学構内。
バイト松本、電話をしている。

松本 もしもし、あ、俺だよ。いやあ、これからさ、バイトなんだ。…(かなり怒っている相手)いや、悪い、ごめん、許してよ。今度絶対埋め合わせするから。…うん。それがさ、昨日、大学でバイトしたんだけど、それが終らなくてさ。…なんかよくわかんないんだけど、数字をひらがなに置き換えるんだよ。…うん。それが終らなくてさ、きょうまた続きなんだよ。…うん。それが山のようにあってさ、目が疲れるんだ、これが。ああ、とにかくさ、終わったらすぐいくから、…うん。そんなじゃな。

切る。退場。

公園。

さなえ、目木、登場。

さなえ バツケベルギアミリタリス。

目木 …。

さなえ マンミラリアソリシオイデス。ノバルクソキアマクドウガルリイ。ペディオカクトウスデスパイニイ。ペディオカクトウスクノウルトニイ。ペディオカクトウスバビラカントウス。エキノマストウスエレクトケントルス。エキノマストウスマリホセンスイス。スクレロカクトウスグラウクス。スクレロカクトウスプビスピヌス。トゥルビニカルプスロフォオロイデス。トゥルビニカルプスヴァルデジアヌス…。

目木 ちよつと、待った。

さなえ どう？

目木 どう、とは？

さなえ すこい？

目木 なにが？

さなえ 覚えたの。

目木 何を。

さなえ ワシントン条約で取引が規制されている動植物よ。

目木 ほう。

さなえ いまのはサポテン科なの。いろいろあるのよ。これが例えば軟体動物目のイシガイ科になると、トリバネヌマガイ、ヒトコブヌマガイ、カーチヌヌマガイ、サンフソンハナヌマガイ、アラスジハナヌマガイ…

目木 待て待て待て。…それどのくらいあるんだ。全部で。

さなえ 動物と植物あわせて千とちよつと。

目木 …それ、全部覚えたの。

さなえ (うなずく) 偉いでしょ。

目木 さなえちゃん。

さなえ なに。

目木 君は中学三年生だ。そして僕は君の家庭教師だ。僕の仕事は君を高校に入れること。そうだよな。

さなえ そうね。

目木 ここまではよし。で、君の今すべきことはなにか。動物や植物の名前を何の脈絡もなく千個覚えられるその柔軟な記憶力を、ほんのちよつとでいいから受験勉強に向けること。それが僕のさなえちゃんに対するささやかなお願い。わかってもらえる？

さなえ せっかく覚えたのに誉めてもくれないの。

目木 偉い。素晴らしい。

さなえ 心がこもってない。

目木 (心をこめて) 偉い。素晴らしい。

さなえ まだまだ。

目木 偉い。素晴らしい。よく覚えたね。

さなえ そうかな。

目木 そうだよ、こんなこと普通の人間には到底出来ないよ。君のその小さな頭には、天才的なヒラメキと神秘的なキラメキがあるよ。

さなえ 照れちゃつな。

目木 すごいよ。すごいから、さなえちゃん、そろそろ家帰って勉強しよ。

さなえ や。

目木 さなえちゃあん。

さなえ あつ。

さなえ、目木を引っ張って隠れる。

さなえ センセ、こつち。…こつちってば！

目木 なんなんだ。

さなえ しいつ。静かに。

千鶴子と飛田林、登場。

飛田林 …というわけで、どんなもんでしょう。健太と付き合ってやってもらえませんか。でしょうか。

千鶴子 はあ。でも、あの、やっぱりお客さんとそういうのは、ちょっと…。

飛田林 それはわかります。とにかくあいつは、ええと、あの…

千鶴子 高林です。

飛田林 はい。高林さんと外で会ってお茶を飲むなり映画を観るなり、そういうことがとりあえずしたいわけで、それなら特に問題はないでしょう？

千鶴子 でも、安田さんみたいにお若い方とわたしでは、釣り合いというものが…。

飛田林 健太本人がいいといってるんだから気にされなくてもいいんじゃないでしょうか。

千鶴子 それに、わたしには十五になる娘がいますし…。夫が残した借金もあって、とてもそんな、遊び歩くようなことは…。

飛田林 どうせ相手も高校出たての安サラリーマンですから、そんな派手な遊びはしませんよ。

千鶴子 それはわかりますけど…。

飛田林 は？

千鶴子 あら、すみません。

飛田林 とにかく、一度、外で会ってやって下さい。その後、あなたがいやなら僕が奴に言ってきかせますから。

千鶴子 ……わかりました。

飛田林 オーケーですか。いやあ、よかった。肩の荷が降りました。

千鶴子 はあ。…肩に荷が乗りました。

飛田林 じゃあ、なにとぞひとつ安田健太、安田健太をよろしくお願いします。それじゃ。

千鶴子 どうもごころう様でした。

飛田林、千鶴子、別れて退場。
出てくるさなえ、目木。

さなえ ……なにになになになになに。

目木 ナニナニ目ナニナニ科の動物？

さなえ はあ？

目木 いや、なんでもない。…しかし、さなえちゃんのママがねえ。もてるなあ。

さなえ 聞いた？ 相手の人高校出たばっかりだって。あたしと三つくらいしか違わないのよ、あの女といくつ違うと思う？ 二十よ二十一！

目木 また、そんなお母さんのことをそついう言い方する。

さなえ 許せない！ どうせ変態に決まってるわ。あんなクラブの客なんて、みんな変態なのよ！ だいたい高校出てすぐそんなところに通うなんて、信じらんない。

あの女にお似合いの奴なのよ。そつよ。きつとそつだわ。ああ、悔しいっ！

目木 なにを悔しがってるのかよくわかんないぞ。

さなえ いいのよ！…どんな奴が突き止めてこの目で見て確かめてやるわ。安田健太！

目木 ……(はたと気付く) 安田健太？

さなえ そつよ。名前からして変態そつよね。ね。

目木 ……おいおいおいおい。

さなえ オイオイ目オイオイ科。

目木 ……(考え込んでいる)

さなえ 相手にしてよ！

目木 さなえちゃん。…本日は自習。

目木、急いで退場。

さなえ あ、ちょっと、センセエ。目木センセエってば……なによ。バカア！

さなえ、退場。

老婆(千満)登場。道端で固まる。
安田B、登場。

安田B ……(立ち止まって)おばあちゃん、べつかした？

千満 ……

安田B ……具合でも悪いの、おばあちゃん。

千満 …。

安田 B もしもし。

千満 …。

安田 B もしもし！

千満 (受話器をとる真似) はいはい。

安田 B …。

千満 もしもし。 もしもおし。 … なんだ。 イタズラ電話。(切る真似)

安田 B … なんだボケてるだけだ。(去りかける)

千満 … もし。

安田 B …。

千満 もしもし。

安田 B … (ちよっと考えて受話器をとる真似) はいはい。

千満 … あー。こりゃあどうも。 … えー、これがハンコ、これが米穀通帳、これが母子手帳、これが…。

安田 B いやちよっと。 もしもし、おばあちゃん、いいいいの。それはしまつて。

千満 … おう？

安田 B おばあちゃん、どうかしたの？

千満 おお、これはどうしたことだ。(あわてて品物をしまつ)

安田 B おばあちゃん、具合でも悪いの？

千満 わたしやあ、なんも悪いことはしとらんが…。

安田 B いやいや、そうじゃなくてね、おばあちゃんがそんなとこにじっとしてるから、どうか具合でも悪いのかと思って。

千満 んにや。どうこも悪くないよ。

安田 B あ、そう。 …。(受話器を持つと擬した手を降ろす)

千満 切るでない！

安田 B へ？

千満 切るでない。

安田 B (気付いて) あ、ああ。(戻す) おばあちゃん、そんなとこでなにしてるの。

千満 覚えとらん。なんも。

安田 B 覚えてないって、おばあちゃん、家どこよ。それも覚えてないの。自分の名前いえる？ まいったな、こりゃ。完全にボケてるよ。

千満 家は4丁目の古本屋の二階。

安田 B え…。

千満 名前は安田健太。十八歳。高卒。有限会社八巷印刷勤務。趣味、エスエム…。

安田 B ちよ、ちよっと待った！ 何でそんなこと知って…。

千満 切るでない！ … なんも覚えてないのはあんたの方だよ。

安田 B 俺、どこかではあちゃんと会ったっけか？

千満 んにや。

安田 B じゃ、なんで俺のこと知ってんだよ。

千満 やれやれ。

安田 B いや、やれやれって。

千満 この分じゃもうひとりの方もこの調子なんだろうなあ。

安田 B もうひとりってなんだ。

千満 もうひとりの安田健太だよ。まったくまぎらわしいことおびたしい。

安田 B はあ…？

千満 もうすぐあんたらふたりは、出会う。そして歳月は流れ、あの雨の夜にたどり着く。もはやそうなってみんなことにはわからん。どっちが本当に毒を飲んだのか…。

安田 B …なんだかさっぱりわからん。

千満 まあいいわ。それもあつという間だよ。それこそ夢のように、あつという間さ…。(去りかける)

安田 B ちよつと、ばあちゃん。…もしもし。もしもし！

千満、退場。

安田 B もしもし！ もしもし！

飛田林、登場。

飛田林 なにやってんだ、おまえ。

安田 B あ。

飛田林 よろこべ。約束とりつけてきたぞ。

安田 B ほんとか！

飛田林 今度の日曜、二時、駅裏の公園。

安田 B ありがとう。恩に着るよ。

飛田林 ま、がんばれよな。…じゃ、俺はいくから。

安田 B おう。サンキュー。今度おくるからな。じゃな！

飛田林、手を振って退場。

安田 B よしー…風呂いじう。

安田 B、退場。

喫茶店。

目木、登場。喫茶店。座る。

目木 …ホツト。

当麻、登場。目木、合図する。

当麻 (座って) わかったわ！ わかったわよ！

目木 なんですか、やぶから棒に。

当麻 コンピューターに侵入してる奴よ。

目木 ああ、例の安田健太ですか。

当麻 そうよ、そう。あなたなに落ちついてんのよ。

目木 いや、こういう性格なんですよ。

さなえ、コート姿にサングラスで変装して登場
少し離れて座り、聞き耳をたてる。

当麻 あいつよあいつ。…カフェオレ。…電気屋よ。電気屋。

目木 なんですか、電気屋って。

当麻 安田健太よ。

目木 安田健太が電気屋なんですか。

当麻 あの電気屋は二セモノよ。

目木 ああ？

当麻 あたしんちのアパートの裏が質屋だって言ったでしょ。

目木 いいや、初耳。

当麻 その二階で見たのよ。どっかでみたと思ったのよね。それで調べたの。そして案の上よ。

目木 安田健太ってのが、質屋なの？

目木 違うわよ、もう！

目木 なんだかさっぱりわからん。

当麻 あーッ、もう。

目木 少し落ち着きなさいよ。(コーヒ・来る)その電気屋ってのはなんなんですか。

当麻 ホラ、こないだ会ったでしょ。あんたんとこの研究室の前で。

目木 …？

当麻 ほら、学食でゴハンおごってあげた時。

目木 …ああ。

当麻 あたしあの時、どっかで見たことあるって言ったでしょ。

目木 ああ、電気屋って、検針の係員のこと？

当麻 なによ。

目木 いや、いいけど。俺、顔見てないんだ。

当麻 あたしは見たのよ。どっしてもどっかで見た顔でさ、あれから気になって、よく思い出してみたのよ。あいつ質屋の二階に住んでるのよ。

目木 それが当麻さんちのウラにあるわけね。

当麻 そ。それでね、質屋にいつてその主人に聞いたところが、なんと、そいつの名前が安田健太。

目木 ビンゴ。

当麻 どうする？

目木 もう、誰かに言ったの。

当麻 先生には話したわ。

目木 それ以外は？

当麻 (首を振る)。

目木 そうか、配電室にはホストにつながる回線が通ってるんだ。ワイヤートラップだ…。

当麻 なによ、それ。

目木 センターからの専用回線に迂回路をつくって、その間にターミナルを割り込ませてデータを送り込んでるんですよ、多分。とんでもない奴だな、ホストで使ってるパスワードを全部解読してやがんだ。

当麻 何だかさっぱりわからない。

目木 とりあえずこの話、口外無用ですよ。まだはつきりしたわけじゃないんだし。

当麻 はつきりしてるわよ。あいつがやったに決まってるわよ。

目木 とにかく、少し調べてみます。おっと、もう二時か…。じゃ、これで。

当麻 どこいくのよ。

目木 きょうはちよつと予定がね。

当麻 あ、ちよつと、レシート持っていきなさいよ！

目木、退場。

当麻 まったく、あの貧乏学生は…。

しびしびレシートを持ち、退場。

さなえ (立ち上がり、サングラスをはずす)…質屋の二階、とね。

さなえ、退場。

公園。

安田B、登場。落ち着かない様子でソワソワしながら待つ。

千鶴子、登場。安田Bのそばに立つ。

安田B、普段着の千鶴子を、それと気付かない。

千鶴子 あの…。

安田B はい？

千鶴子 わたし…。

安田B …何か御用ですか。

千鶴子 いや、御用っていうんじゃないんですけど…。

安田B …。

千鶴子 …あの…。

安田B …なんですか。

千鶴子 ひよつとして誰か探してます？

安田B …待ち合せしてるんです。…そろそろ来るはずなんだけどな。

千鶴子 それって、女のひとですよね。

安田B そつですよ。いけませんか？

千鶴子 いいえ…。

安田B …。

千鶴子 もつ、来てるんじゃないかなあ。

安田B 来てませんよ。来れば分かりますよ、一目で。

千鶴子 一目で。

安田B ちよつと、あんまりくつつかないで下さいよ。こんなところを彼女に見られて

誤解されたら困るじゃないですか。

千鶴子 すいません、気がつきませんで。

千鶴子、あわてて一歩下がる。

千鶴子 …あの。

安田B …なんですか。

千鶴子 …ほんとに一目で分かるんでしょうか。

安田 B 分かりますよ！ しつこいな。万博の会場だったって、彼女が歩いてれば一発でわかりますよ。すごいんだから。

千鶴子 あ、すごいって、なにが…

安田 B え？ だから、すごいんですよ、こう…(手振り)

千鶴子 これ、なんですか。

安田 B これ、これはムチですよ、ムチ。

千鶴子 はあ…。でもあの、街なかでその格好は…しないと思うんですけど…。

安田 B 分かっていますよ、そんなこと。

千鶴子 はあ…。

千鶴子、困って黙る。

千鶴子 あのう…。

安田 B うるさいな！ 話しかけないでくださいって言ってるでしょう。

千鶴子 すみません。

千鶴子、しばらく黙っているが、意を決して、バックからキャッツアイをとりだしてつける。

千鶴子 …。

しばらく横に立っているが、安田 B 気付かない。

千鶴子、ちよつと男を小突く。相手にしない安田 B。

千鶴子、髪を結んでいるリボン解いてムチのかわりにする。ちよつと叩く。

安田 B あいて。いて。なにすんだよ。

千鶴子 奴隷のくせに頭が高い。

安田 B エミリー女王様！ (膝まじく)

千鶴子 あ、そんな、どうかお手をお上げになって。

安田 B いやあ、来てくれなにかと思いましたが。もう、死んでもいいです。

千鶴子 そんな。あの、どうも今日は誘っていただいて。

安田 B 僕のほうこそ無理言ってますみません。お店のほうは大丈夫なんですか。

千鶴子 はい。非番ですから。

安田 B あ。じゃ、あの、とりあえず歩きましょうか。そこからとりあえず、お茶でも。

千鶴子 あ。はい。

ふたり、歩き出す。どつしても一歩遅れる安田 B。

千鶴子 あの。

安田 B はい。

千鶴子 前、どつぞ。

安田 B はい？

千鶴子 前、歩きませんか？

安田 B え、僕がですか。まさか。

千鶴子 まさかって、男の方の前を歩くのはちよつと。

安田 B エミリー女王様の前を歩くなんて。そんな畏れ多い。

千鶴子 それ、やめて下さいな。恥ずかしい。千鶴子でいいですから。

安田B 千鶴子女王様。どうぞ前を。
千鶴子 …。

再び、キャッツアイを取り出し、ムチ（リボン）を鳴らす。

千鶴子 前をお歩き！ おまえに露払いを命じる。

安田B （感動して）ありがとございます！
千鶴子 …。

安田Bを前にして、ふたり、退場。

大学。

学部長、日浦、登場。

学部長 目は通した。ちょっと信じられんような話だがね。

日浦 義務として報告したまでです。

学部長 コンピュータ犯罪ってわけか。

日浦 犯罪と決まったわけでもないでしょうけど。

学部長 まだ日本じゃあまり前例がないんだ。海に向こうじゃこの手の事件で年間数百万ドルの被害があるそつだよ。こつちじゃようやく銀行の窓口業務が自動化されてきたばかりだ。たしかに便利だね、キャッシュカードってやつは。これから増えていくんだろうな、こつちう犯罪も。

日浦 その後コンピュータを通じてやり取りしたところでは、この少年には明確な犯罪の意識はありません。むしろ機械のなかの難解な暗号を、パズルのように解いていくことに喜びを感じているだけです。

学部長 少年といったね。

日浦 安田健太は十八才です。彼自身の弁によれば。

学部長 一種の天才だね、こつちうのも。…とにかく対応を考えるよ。

日浦 ほかになければこれで。

学部長 ああ。

日浦 使用出来なくなりますか。

学部長 まだそこまではしないよ。もう少し調査してからでないと、あれも止めるとなるといろいろ厄介だから。…君の方は、今マシンを止められるとお手上げなんだろう？ 止むを得ない場合は連絡するぞ。

日浦 分かりました。失礼します。

学部長 本当に義務だけかい？

日浦 …。

学部長 この大学に大型コンピュータを導入させたのは俺だ。日本の大学じゃじめてのことさ。その功績で俺は学部長にあがった。

日浦 …。

学部長 その際にいろんな噂が飛んだことは君も覚えているだろう。契約に動いた金。導入にこぎつけるために裏で交わされた密約…。

日浦 ええ、覚えてます。私には興味のない話ですけど。

学部長 そつか。俺はこいつを見たとき、君が忠告してくれているような気がしてね。マシンの中に人目に晒しちゃうまずいものがあるなら今のうちにどつかに隠せて。

日浦 もしそれが本当のことなら、私が忠告するまでもなくとつくにあなたは手を打つてはまずです。(一礼して去りかける)

学部長 もうひとつだけ。この子のことがもう少しわかったら教えてくれないか。「文通」は続けるんだろ。…そう、例えば、居場所とか。

日浦 (学部長の目を見る)…。

学部長 …。

日浦 (目をそらす)…。わかりました。

日浦、退場。

学部長 … 先生はお帰りになったよ。

当麻助手、登場。

学部長 質屋の二階だつて？

当麻 はい。間違いありません。

学部長 向こうに情報は流したかい？

当麻 はい。

学部長 じゃあ、目木が動くな。あとはこっちでやるから、日浦君を見ててやってくれ。

当麻 わかりました。…珍しいですね、日浦先生が仕事以外のことに興味をもつなんて。

学部長 興味をもってるってどうしてわかる？

当麻 研究そっちのけで、あの妙な文通に熱中してらっしゃるし、安田健太の居所も、知ってるはずなのにおっしゃらなかつたので。

学部長 …うん、そつだな。

当麻 どうしてなんでしょう。

学部長 … 相手が機械のなかにいるからじゃないかな。

当麻 …？

学部長 (時計をみて)さて、ちよいと客がくるんだ。はずしてくれ。

当麻 あ、はい。失礼します。

学部長 ごくろうさん。

当麻、退場。

紙飛行機が飛んでくる。学部長、床に落ちたそれを拾う。

和服の老人(黒崎)、登場。

黒崎 (飛行機を受け取って)もう少し飛ぶかな。もう少しかな。

学部長 もう少しでしょう。

黒崎 … 尾翼がちよつとな、重いか知れん。

学部長 先を少し折り込んだら…

ふたり、紙飛行機をあれこれいじって、再び飛ばす。

黒崎 … どうかね、オモチヤの調子は。飛田林学部長。

学部長 はあ。さすがアメリカが巻き返しをかけて本腰を入れてるだけあります。日本

より十年は進んでる。

黒崎 やつらベトナムで負けてやっきになつてるのだ。議会がうるさくて軍事予算が思うようにとれんもんだから、民間にテコいれして巨大コンピュータを幾つも造って、戦闘機の設計、レーダー網の施設、ミサイルの弾道計算、なんでもやらせる。

学部長 この国ではおおつぴらにできないことばかりですな。民間企業の力も足りない。黒崎 だからこそ、あんなところでこっそりやらせておる。これは国家百年の大計だよ。そのおかげであんなのよつなのんべのグウタラ教授がこうして学部長としておさまりかえっているんじゃないか。

学部長 耳が痛いですな。ところで、黒崎さん。我が国の民間企業の技術力はまだまだだが、個人レベルでは世界に通用しそうな水準に達しているよつでしてね。

黒崎 ふん。妙なハエがうるちよろしとるよつだな。

学部長 ええ。おそろく日本にはふたりといない天才でしょうな。アメリカあたりに生れていれば、コンピュータ業界の頂点に立てるかもしれない。

黒崎 コンピューターなんぞというオモチャはどうでもいい。飛田林学部長。わしは研究だの学問だのという遊びに金を出しているんじゃない。わしらのやつとることとはれつきとした軍事開発事業だ。やつらの戦闘機に負けない飛行機を、再び自分たちの手で作り出すための第一歩だ。障害はすみやかにとりのぞかねばならんのだよ。

学部長 なるほど。

黒崎 策は…。

学部長 とりあえずA関係のファイルは退避させました。磁気テープは私が保管しています。クレイは今きれいな状態です。ただ、すでにコピーをとられているかもしれません。

黒崎 で、飛びまわつとるハエの巢は。

学部長 つきとめました。

黒崎 よからう。あとはわしのほうでやる。とにかくAのつくファイルは人目に触れさせんようにせねばならん。

学部長 荒っぽく行くおつもりですか。

黒崎 伊藤にやらせる。やさしくというわけにはいかんだろう。ま、一杯やって待つてることだな。

黒崎、退場。

学部長 …キチガイじじいが…。(手にした紙飛行機を握りつぶす)

学部長、退場。

喫茶店。

安田B、千鶴子、登場。座る。

安田B いやあ、本当にとんだとばつちりでしたね。警察…あ、お、俺コーヒー…。警察

察ではどんなこと聞かれ…え、あ、あの、なに飲みます？

千鶴子 あ、コーヒーを…。

安田B コーヒーふたつ。…警察ではどん…え、早いな。(コーヒー来る)

千鶴子 …。(クスリ)

安田 B (しばらく待って) やっと落ち着きましたね。警察ではどんなこと聞かれたんですか？

千鶴子 あの、その話は…。

安田 B あ、そうですね。思い出したくないですもんね。

たちまち会話につまる安田 B。

目木、登場。座る。

安田 B …。いやあ、なんか緊張しちゃって…。ちょっと失礼します。

千鶴子 あ、はい。

安田 B、席をたって退場。

コーヒー来る。

バイト松本登場。

松本 あの。

千鶴子 はい？

松本 高林さんですよ。

千鶴子 そうですけど…。

松本 これ、預かって来たんですけど…。(紙片を渡す)

千鶴子 (目を通して顔色が変わる) さなえが…！

松本 あの、それで、案内するように言われてきたんですけど。

千鶴子 お願いします。(慌てて席を立つ)

ふたり、退場。見送る目木。

安田 B、登場。

安田 B …あれ。

すわってキョロキョロする安田 B。

なんとなくコーヒーをすする。

目木、近寄る。

目木 …。安田健太くん、ですね。

安田 B …。そうですね…。

目木 ちょっと話したいことがあるんだ。すこしばかり付き合ってもらいたい。

安田 B 話って、なんですか。

目木 ここでは言えないな。

安田 B 駄目ですよ、デートの最中なんだから…。

目木 しかしお相手の女性は帰ってしまったようですよ。

安田 B 帰ったって…。そんなバカな。

目木 若い男が迎えに来てたよ。ずいぶん慌てて急用のようだった。

安田 B そんな…。

安田 B、店をでようとすると、目木が腕をつかむ。

安田 B 離せよ。

目木 デートは後回しにしてもらいたな。どうしても君に確認したいことがあるんでね。

安田 B 離せたら、おい。

目木、安田Bを引っ張って退場。
さなえ、登場。

さなえ …見失ってしまった。センサー、どこいったのー。おや。

松本、千鶴子、登場。
さなえ、隠れる。

千鶴子 あの、わたしのお店じゃ…

松本 この裏です。

伊藤、登場。

松本 あの、お連れしましたけど。

伊藤 ああ、ごくろうさん。これ、バイト代だ。

松本 ありがとうございます。じゃ、失礼します。

伊藤 はい。

伊藤、千鶴子の腕をつかんで一緒に退場。
さなえ、松本に声をかける。

さなえ あの。

松本 はい。

さなえ いまさつきそこに、その…女の人といらっしやいましたよね。

松本 ああ。あれね、アルバイトだよ。

さなえ アルバイト？

松本 いま男の人もいたろ。あの人に頼まれて、手紙を届けたんだ。

さなえ あの、あの男の人は誰なんですか。

松本 あの屋敷の人だと思っけど…なんで？

さなえ いえ、いいんです。どうも。

松本 じゃ。

松本退場。

さなえ退場。

千満婆登場。

後ろからさなえ登場。

さなえ 婆ちゃん！

千満 あー。

さなえ 婆ちゃんてば！

千満 うー。

さなえ 婆ちゃん、あたしあたし。

千満 誰かい。

さなえ あたしだってば。ほら。

千満 あ。

さなえ わかった？

千満 ああああこりゃあどつも。

千満、懐から次々と物を取り出す。

千満 これがハンコ、これが米穀通帳、これが母子手帳、これが…

さなえ おい。おい。

千満 おーい。おーい。おーい、おいおいおい…(泣き出す)

さなえ この婆は…

千満 ありやあちよつと中国との戦争が終わった年だった。

さなえ もういいって言ってるんだろ！ 千満婆ちゃん！

千満 はっ。

さなえ 婆ちゃん、いいかげんでその見境なく全財産広げる癖やめなよね。

千満 おや、誰かと思えばさなえちゃんかね。

さなえ あい。

千満 こんな時間にどうしたね。学校は。

さなえ いいのいいの学校なんて。だってバカな子ばかりなんだもん。

千満 ああいけないねえ、他人様を馬鹿呼ばわりしちゃうあ。いいかいさなえちゃん、他人様をね、馬鹿呼ばわりすると、ウンチがでなくなるんだよ。

さなえ なんじゃそりゃ。

千満 年寄りの言うことはきくもんだよ。

さなえ そんなことよかさ、婆ちゃんに聞きたいことがあつてきたの。

千満 うんうん、そうだろそうだろ、いいかいさなえちゃん、よくお聞き。出るものが出ないということはねえ、人間の魂でもんがねえ…

さなえ ちがつの。その話じゃなくてえ。

千満 アイ。

さなえ 婆ちゃんさあ、ずうつとこの町に住んでるんですよ。

千満 アイ。

さなえ そしたらさあ、この町のことよく知ってるでしょ。

千満 アイ。

さなえ あのね、三丁目に「ダイヤモンド・ダスト」っていうクラブがあるでしょ。

千満 さなえちゃんのママが働いてるところだろ。

さなえ ママじゃないわよあんな女！ 冗談やめてよ。

千満 あんた、まだそんなこと言ってるんかね。ママだって好きでやつとりやせんことくらい分かってるろうに。旦那さんが亡くならさつて、女手ひとつでさなえちゃんを立派に育てようとして、毎日毎日あのSFクラブで…

さなえ SMよ！

千満 ありやあ、大きな声で。

さなえ とつとつ警察にまで連れてかれちゃつて、恥ずかしいったらないわよ。

千満 ありや不可抗力ちゅつもんだよ。お客さんがいくいくーちゅつてそのままほんとにポツクリ逝つちまつたんだから。

さなえ 責め殺したんじゃないの。

千満 それが仕事なんだから…

さなえ あたし知ってるもん。お店で使ってるムチだつて、あたしが物心ついたときからウチにあつたもん。あの女はぜつたい好きでやつてるんだ。

千満 好きな道でおまんまが食えるなら有難い話じゃないかね。

さなえ そう。あの人の勝手よ。あたしに関係ないもん。

千満 またそんなことを。

さなえ そんなことより、あのビルの裏手におつきな屋敷があるでしょ。あれ、誰の家
だか知ってる？

千満 アイ。

さなえ 知ってるの？ やった。どこのなんて人？

千満 あそこら一帯はみいんな、黒崎さんという地主さんの土地だったんだけどねえ。

さなえ 土地だったって、今は？

千満 今でもそうだと思っただけねえ。

さなえ 思っただけ？ けどなに？

千満 いや、こういう喋りかたなだけなんだけどねえ。

さなえ クロサキさんね。

千満 そうなんだけどねえ。

さなえ サンキュー、婆ちゃん、またね。

さなえ、急いで退場。

千満 そうなんだけど、あのお屋敷はねえ、確かそう、八年前…いや…九年…いやいや、あれは…ああ…いやいや…そう十一年前に、人手に渡ってねえ…そう、今は確か、い、い、伊藤さんとかいう、あれは確かヤクザの代貸しの…あれえ、さなえちゃん(とつくにいない)さなえちゃん!…やれやれ。せっかちな子だよ
まったく。

千満、退場。

伊藤邸。

伊藤、千鶴子、登場。

千鶴子 あの、さなえは、さなえが事故に遭ったってというのは…

伊藤 根子田のハンコと通帳は。

千鶴子 は？

伊藤、やおら千鶴子の頬を張り飛ばす。

千鶴子 あっ。(倒れこむ)

伊藤 とぼけるな。根子田のハンコと通帳は。

千鶴子 なにをするんです…

伊藤 (千鶴子の髪をつかんで引き起こす)しらばっくれるなよ。あいつが死ぬ前に一
緒にいたのはおまえだけだ。吐け! 吐くんだよ!

千鶴子 私なにも知りません。警察でもそついいました。

伊藤 黙ってる。

千鶴子 本当になにも知らないんです、私。

伊藤 黙ってる。口をきくな。

千鶴子 …。

伊藤 こっちはあんたのことをよく知ってるんだよ。根子田がもうずいぶん前からあんたにこれあげてたこともな。いいか、やつに任せた取引はな、ヘロイン二キログラム、現金にして一億四千万の大商いだ。あのガキ、その金をそっくりそのままめえの口座にぶちこみやがった。たいしたやつだよ、組の金一億四千万、丸ごとバクったんだよ。あいつは。そしてトンズラする前にお前のところにあがった。おおかた横取りした金の使い道でも相談してたんだろつが。

千鶴子 そんな…違います。そんな話ひとことも…

伊藤 金はやつの名義の銀行口座だ。サツにカンづかれる前に押さえなきゃならん。ところがやつがヤサからはなにも出てこない。こっちは手も足もでない。そうとくればあんたに聞くしか方法はないんだよ。

千鶴子 知りません。本当に…

伊藤 悪いが信用できないんだ。俺があんたを信用するときは、あんたが口を割ったときだけだ。

千鶴子 知らないんです…。

伊藤 ま、口を割らせる方法はいくらもある。言っとくが俺はサツほどやさしくないぜ。来い。

千鶴子 あッ…

伊藤、千鶴子をひきずって退場。

別の場所。

質屋を探すさなえ登場。

さなえ 質屋、質屋…質屋の二階…ここだ。落ちて着け落ちて着け…。ハコスッポン。クロスッポン。インドスッポン。フルムスッポン。…ウスゲロスッポン。…よし。

踏み込むさなえ。

さなえ 安田健太！ でてらっしやい！

誰もいない。さなえキョロキョロ。

さなえ 安田さん…いないの。大変なのよ…。留守かあ…。…変な部屋。変な機械がゴロゴロしてる…。

さなえ、気抜けして坐り込む。

さなえ …どっしよつ。あそこに乗り込むのに一人じゃこころもとないし、目木センセならうってつけなんだけどどっかいつちやっしたし…。もう！ 安田健太ア！ どうしていないのよ、こんな時に…！

さなえ、立って帰ろうとする。安田A、登場。鉢合せ。

さなえ あいた！

安田A あ、いつつ…

さなえ 痛いわね！ もう。気をつけなさいよ！

安田A すいません。

さなえ あんた誰よ。

安田 A え。誰って。ここ僕の部屋なんですけど…。

さなえ なに言ってるの、ここは安田健太っていう人の…。

安田 A (私です、とうなづいて) なんか、御用ですか。

さなえ 安田健太?!

安田 A はあ…。

さなえ 一緒に来て!

安田 A あ、ちよつと…。

さなえ、安田 A をひっぱって退場。

別の場所。

安田 B、突き飛ばされるように登場

目木、追って登場

安田 B なんなんだよ、一体…。

目木 安田健太君。僕らはね、君の腕を買いたいんだ。

安田 B 印刷なら会社通せよ会社。

目木 クレイの中には A・SYS と呼ばれる最高機密区間があつて、飛田林学部長以外のだれもそのエリアにさわれないようにプロテクトされている。

安田 B あ…え…えいひれ?

目木 A・SYS とはイー・システムの略。A は ARMY の A。軍事技術国産化のためのデータベースだ。こいつは飛田林が学部長の椅子と引き換えにクレイに埋め込んだ。クレイ導入の際に金をだした右翼フィクサー黒崎の要望でね。

安田 B (ボクサーの真似)…。

目木 (無視) 黒崎はこの辺一体をしきる地主でもある。大学の用地買収の時も懐刀の伊藤が派手に動いた。僕らとしてはなんとかこいつら日本の再軍国化をたくらむ吸血鬼どもの尻尾をつかんでやりたい。ところが A・SYS のプロテクトは誰も破ることができない。そこに君があらわれた。クレイのまっただなかに、降つてわいたようにね。

安田 B …。

目木 わかるだろ。やつらの鼻をあかすためにも、君のその奇跡的なシステム破りの腕が必要なんだ。

安田 B ちよつとまった。

目木 何だ。

安田 B 飛田林っていったな。

目木 ああ。

安田 B あの、飛田林か。

目木 あの、とは。

安田 B これ(S)の。

目木 なんだそれは。

安田 B これつたらこれだよ。

目木 なんか知らんがそうかもしれん。

安田 B さてよ、学部長とか言ったな。そうするとTビのオヤジのことか…。

目木 まあ、じっくり考えてもらおう。結論が出るまで…。

安田 B おい、ちょっと待てよ。俺はデートの最中だっていったろ。おい！ ちょっと待て。おまえらまさか千鶴子女王様に…

目木 君のお相手の女性のことなら、我々はなにもしていない。君がひとりになる機会を窺がっていただけだ。それにしても…ずいぶん年増好みなんだな、君は。

安田 B …。

目木 ま、いい返事を期待してるよ。

目木、退場。
暗転。

ACT 5

伊藤邸、外。
さなえ、安田 A、登場。

さなえ ここよここ。ここに入っていったの。クロサキって人の屋敷。

安田 A だから、人違いだつてば…

さなえ もつ、往生際がわるいわねえ。潔く認めなさいよね。

安田 A 困つたなあ。

さなえ さ、はいるわよ。

安田 A あ、ちよつと。

さなえ なに？

安田 A クロサキじゃなくってイトウってかいてありますよ、ここに。

さなえ ほんとだ。婆ちゃんボケてんのかなー。やっぱり。

安田 A やっぱりやめましようよ。なんかここヤバそうですよ。

さなえ いいから！ 男を上げるチャンスなんだから！

安田 A 上げなくていいですよ。

さなえ 何いつてんの。あんた、あたしのお父さんになるかもしれないのよ。もっと堂々としなさいよ。

安田 A なんでそうなるんですか。

さなえ いくわよ、ほら。前、前。

伊藤邸に忍び込むさなえ、安田 A。

さなえ こつちかな。

安田 A こつちじゃないですか。

さなえ そつちは出口ですよ。

伊藤、登場。

伊藤 そこでなにしてるんだ。

さなえ でた！…（安田 A、くるりと回れ右して逃げようとする）ちよつと、どっこいくの？

安田 A いや、どこつて…。ありやどう見てもヤクザ…。

伊藤 おまえたち、ここがどこだか分かってるのか。

さなえ 伊藤さんの御宅ですよ。

伊藤 伊藤は俺だが。おまえらはなんだ。

さなえ ここに、高林千鶴子がいますよね…。

伊藤 ああ？

安田 A あ…この子の母親だそつななんです。

さなえ あんたの恋人でしょ。

安田 A だから、それは違つ…。

さなえ 返して欲しいんです。

伊藤 はあん、あの女の娘か、おまえは。中学生か？

さなえ はい。

伊藤 ずいぶんとまた大きなガキがいたもんだな。(ジロジロ見る) はあん。近頃の娘は発育がいつっていつのか…。で、おまえはなんだ。

安田 A (ビクリ) は。

伊藤 この娘の、おまえは、なんだ？

安田 A いや…なについていうか…安田です。

伊藤 誰がそんなこと聞いた。

安田 A すいません。

伊藤 まあいい。で、なにしにきたって。

安田 A いやあの…帰ります。

さなえ ちよつと、しっかりしてよ。

安田 A そんなこと言ったって…。

さなえ 仮にもあんたの好きな女が危険にさらされてんのよ。

安田 A 違うんだって…。

さなえ 男でしょ！

安田 A あつちの方がもつと男だから…。

さなえ いいからピツとしなさいよ。

安田 A …(伊藤に向かつて)あの…ですね…「こちらにお邪魔しているですね…高林千鶴子さんという人を、返していただけたら、なんて思っています…。すいません。ダメだったらいいです。

さなえ もつと強く言いなさいよ。

安田 A はい。…おい。千鶴子を出せ。

伊藤 にいちゃん。

安田 A はい。

伊藤 ええ度胸やのう。

安田 A すいません。

さなえ ダメよ、そんな弱気じゃ。

安田 A すいません。

さなえ 強気よ、強気。

安田 A はい。おい。はやく返せ。

伊藤 おまえらこんなところまでのこのこやってきて無事で済むと思ってるのか。

安田 A もうしません。

さなえ 強気！

安田 A はい。

伊藤 おとなしくもの言ってるつちに聞いとけよ。

安田 A …。(さなえを見る)

さなえ …。(いけ！ やれ！ のポーズ)

安田 A そのセリフそっくりそのまま…納得したぜ。…そういうことで。(去りかける)

さなえ 待て待て待て。

伊藤 いつまで漫才やっとなる気や！ おい、にいちゃん。(来い来い)

安田 A え。

伊藤 こつちこい。早く。

安田 A、おそろおそろ近寄る。
伊藤、ぐいと安田 A の手を引きよせる。

安田 A あ、ちょっと。

伊藤 学生さんの本分は。

安田 A は…。

伊藤 学生さんの本分は。

安田 A …。

伊藤 武士なら刀。極道はドス。(懐から短刀を抜く)

安田 A …。

伊藤 (短刀をしまつて) 学生さんには、これをあげよう。

伊藤、内ポケットから太い万年筆を取り出し、安田 A に握らせる。

安田 A あ、どうも…。

伊藤、万年筆と一緒に安田 A の指をにぎる。

安田 A、叫び声。息を飲むさなえ。

伊藤、手を放す。安田 A、崩れ落ちて、うめく。

安田 A に飛びつくさなえ。

伊藤、万年筆をしまつ。

さなえ 安田さん！ しっかりして！

伊藤 騒ぐな。じっとしてる。

ちよっと引っ込んで千鶴子を連れてくる。
床に千鶴子を投げ出す。

千鶴子 さなえちゃん…！ (かけよる) 大丈夫？ なにもされなかった？

さなえ あたしは平気。それより安田さんが…

千鶴子 この方は…どなた？ さなえちゃんのお友達？

さなえ え。

安田 A …。(うめきつつ) 安田です。

さなえ 安田健太でしょ？

安田 A そつ…です。

さなえ ほら、デートしたいっていつ…

千鶴子 さなえちゃんどうしてそんなこと知ってるの。

さなえ え、いや、まあ。

千鶴子 でもこの方じゃないわよ、わたしの知ってる安田さんは。

さなえ げげ。

安田 A だから言ってる…

伊藤、さなえの髪をつかんで後ろから立たせる。

さなえ あつ。

千鶴子 さなえ！

伊藤 さあて、おかあちゃん。これでしゃべる気になつたらうが。通帳とハンコのありかをな。これでもシラを切るか。だったらとりあえず 利子がわりに娘に体で稼いでもらおうかね、ええ？

千鶴子 やめて、娘に手を出さないで。
 伊藤 だったら、はよしゃべらんかい！
 千鶴子 本当に知らないんです！

伊藤 強情なババアだ。きいたかお嬢ちゃん。娘より金の方が大事だそつだ。
 千鶴子 違います。本当に…。信じて！

伊藤 やれやれ。しかたないな。ほら、来い！
 さなえ いやあ。なにすんのよ！

伊藤 見たとこ、初物やな。売りに出すまえに味見さしてもらおうか。
 さなえ スイカじゃない、バカッ。

千鶴子 さなえ！
 伊藤 逃げるやつたら逃げてみい！ 娘がどうなつてもええんならなあ！

さなえ いや…！ お母さん！
 伊藤 さなえ！

さなえを引っ張って伊藤、奥の部屋へ退場。

安田 A あの…警察いきましようか…僕。

千鶴子 それはやめてください。

千鶴子、キャッツアイを取り出してつける。
 △千代わりのリボンを振る。

安田 A あの、なにをするんですか…。

千鶴子 娘は私が助けます。どうか今のうちに逃げてください。

安田 A …はい、わかりました。

千鶴子 もし、あなたと同じお名前の安田健太さんにお会いになることがあったら伝え
 てください。…「コーヒーごちそうさまでした。」と。

安田 A …はい。

安田 A、退場。

千鶴子、キツとして、奥の部屋へ退場。

しばし間があり怒号とともに、さなえ、千鶴子を追っかけて登場する伊藤。
 床に投げ出されるふたり。

伊藤 なめとんのか、おのれはーッ！

千鶴子 (立ち直って、キツ) お下がりー！ 下郎ー！

伊藤 誰が下郎じゃ、この女郎！ (頭を平手ではたく)

千鶴子 ああッ、効かない。

伊藤 効くか！ (張り倒す)

さなえ やめろ、このー！ (体当たり)

伊藤 ガキヤア！ (投げ飛ばす)

千鶴子 さなえ！ (かばう)

伊藤 (仁王立ち)…おのれらいつべん本気でシバキ上げんとわからんよつやのつ。(へ
 ルトを抜く)

千鶴子 さなえ！

さなえ おかあさん！

伊藤がベルトを振り上げる。
紙飛行機が飛んでくる。
ハッとする伊藤。動きが止まる。

さなえ なに？

千鶴子 紙飛行機が…

さなえ …やしち？

千鶴子 …それは、さなえちゃん、風車じゃなくて？

黒崎、登場

伊藤 先生。こりゃ、お見苦しいところを。

黒崎 ああ、続けて続けて。

伊藤 そんなわけにやいけませんや。おまえら、続きはあとでたっぷりかわいがってやる。あっちいってる。

伊藤、ふたりを奥の部屋に追いやる。

黒崎 またお前に仕事を頼みたくてな。

伊藤 今度はどんな…。

黒崎 子供をひとりおどしつけてあることを聞き出す。場合によっちゃその後は消す。ま、楽な仕事だが、しくじるなよ。

伊藤 心得てます。

黒崎 詳しいことはそれ（紙飛行機）に書いてあるが、今その子はある連中につかまってる。耳もとのハエみたいにつるさい左翼^{アカ}どもだ。ついでにそいつらもおどしといてもらおうかな。

伊藤 承知しました。

黒崎 じゃあ頼んだ。

ふところから紙飛行機をもう一つ出して飛ばそつとしながら、黒崎、退場。
伊藤、退場。

自室にたどり着く安田A、登場。
痛めつけられた指をおさえてひっくりかえる。

安田A （人の気配に気付いて起き上がる）…誰だ。

薄暗い部屋に、日浦助教が入ってくる。

日浦 安田健太って、あなた？

安田A …さあね、もうひとりいるらしいから…あんたは？

日浦 日浦せつ子。

安田A 日浦…ああ、あなたが…

日浦 手、怪我してるの？

安田A あ、ああ…

日浦 見せなさい。

日浦、安田Aの手当をする。

安田 A もう仕事の邪魔はしてないはずですよ…

日浦 わかっているわ。

安田 A 悪気はなかったんです。最初のメッセージを書き込んだ時は、まだあのマシンのメモリの構造がつかめなくて、メクラうちでほうり込んだら、それがたまたまあなたのプログラムが使ってるメモリーにあたって…。つっ…データを上書きしちゃって…

日浦 悪気がないことはすぐわかったわ。

安田 A あれを解読して、同じエリアに返事を書いてくるやつがいるなんて、思いもしなかったな…。でも、どうしてここがわかったんですか。居場所までは書かなかったけど…

日浦 これ、折れてるかもしれないわ。ちゃんとお医者にみせなきゃだめよ。

安田 A ……どうも。

日浦 クレイを使って公にできない情報を処理してる人達がいて、彼らがクレイに侵入したあなたを狙ってるわ。多分もうこの場所も知られてる。ここにいと危ないわよ。

安田 A ……。

日浦 もうクレイに手を出すのはやめなさい。それから、できればここを離れたほうがいいわ。…それをいいにきたの。

安田 A ……。

日浦 ……じゃ、いくわね。

安田 A あの…！

日浦 ……なに…

安田 A なんでわざわざ…僕に？

日浦 そうね…あなたが…

安田 A はい。

日浦 機械の向こうから、話しかけてきたから。

安田 A 機械の向こうから…

日浦 そう。

安田 A ……。

日浦 息子がいるのよ。機械のなかで眠り続けている息子が。もう十八年にもなるわ。

安田の部屋をそのままに、別の場所（エリア）。
目木、伊藤、登場。

目木 なんなんだよ、あんたは。

伊藤 ここに安田健太って小僧がいるだろ。出しな。

目木 そんな奴はいないよ。

伊藤 ネタあがつてんだ、さっさとしろい。

目木 あんた黒崎の手先だな。あんたらみたいなのが日本をダメにするんだ。

伊藤 グダグダぬかすな！

腹にパンチ。目木、床に膝をつく。

伊藤 ……こつちか。

伊藤、退場。

目木 … 待て！

目木、追ってよろけつつ退場。

日浦 … 二十歳の時、ある男と結婚して、その男は考古学者の卵だった。わたしは物理学教室の研究生だった。男は、主婦としてのわたしを求め、わたしはそれに応えてそこをやめた。二十一で男の子を産んだ。男の名前から一字とって健一とつけた。三歳のとき流行性感冒にかかって、そのまま意識が戻らなかった。

… 半年間、子供は機械のなかで生きていた。わたしは大学に戻ろうとした。男はわたしを家から出そうとはしなかった。わたしは手首を切った。

… すべてのは、厚みがなかった。現実には、うすっぺらな、色褪せた、雨に濡れてうち捨てられた週刊誌の低俗な劇画のようだった。意識が戻った夜にわたしは病室から抜け出して屋上の金網に足をかけたところを連れ戻される。次のわたしはよこたわったベットからは、鉄格子越しに空がみえた。

二年間、わたしはそこにいた。その二年の間に、わたしは一人に戻った。……

別エリアで伊藤、安田Bをつれて登場。

目木、おいかけて登場。

伊藤 最初からおとなしく出しゃいいんだよ。… いいか、これ以上妙なマネしやがったら、てめえ、死ぬぞ。

伊藤、安田B、退場。

目木 くそ…。みてるよ。

目木、退場。

安田A じゃあ、今でも病院にお金を送ってるんですか…。

日浦 十二年間、ずっとね。本を書いて、荒稼ぎして、せっせっせと…。

安田A あの、それ、いくらくらい…。

日浦 … そっね、もつどれだけになったのかしら… すいぶん額になってるはずよ。… そっ、南にちいさな島が買えるくらい…。

安田A そんなに…。

別エリアに伊藤、当麻、登場。

伊藤 違う？ 違うってのはどついつことだ。

当麻 あれは安田健太じゃないわ。

伊藤 ちよっと待てよ。あのガキがアカどものところにいるっていったのはアンタだけ。当麻 でも違うわ。別人よ。質屋の二階をあたってちょうだい。

当麻、退場。

伊藤 … ちっ、ひとつがいの荒いおんなだ。

伊藤、退場。

日浦 とにかくその手、医者にみせなきゃダメよ。

安田 A ……また、来ますか。

日浦 ……さあ…。

安田 A ……。

日浦 ……そうね。…また来るわ。

伊藤、安田 A の部屋に行く。

伊藤 安田健太か！ おまえがそうか！

安田 A あ…あの…あつ。

伊藤 手間かけさせやがって、こいつ。

伊藤、安田 A、退場。

暗転。

安田 A、安田 B、地下室に閉じ込められている。

安田 B ……健康の健か。

安田 A はい。

安田 B 健康の健に太陽の太か。

安田 A はい。

安田 B 字までいっしょか。…要するにおれはお前と間違えられたわけだな。

安田 A そうみたいです。

安田 B そうみたいじゃねえよ！ おまえのおかげでとんでもない目にあっただぞオレは！

安田 A そんなこといったって、僕だって、これ…（指）

安田 B だいたいおまえがそんなワケのわかんない、えいひれだかひれかつだか知んないけど、そーゆーあやしげなもんじゃ手え出すからこんな目にあっちゃつんだよ！

自業自得だ、バカタレ！

安田 A ……あの、あなたは、あの、千鶴子さんっていう人が好きなの？

安田 B バカヤロ！ 好きとか嫌いとかじゃないんだよ！ 好きなんだよ！

安田 A あの、子供いますよ。

安田 B それがどうした。

安田 A いくつなんですか、あの人。

安田 B 三十八だよ。

安田 A 同じだ。

安田 B おまえ三十八かよ！

安田 A 十八です。

安田 B 俺と同じかよ…。

安田 A 僕の知ってる人でも、三十八の人がいて、子供もいるんです。

安田 B ……。

安田 A はは。

安田 B だからどうしたんだよ…！

安田 A いや、別に。

安田 B ちつ。…だいたいおまえな、タメ年なんだからよ。そのコトバ使いやめろよ。オレとかオマエでいいんだよ。

安田 A ハイ。

安田 B ハイじゃねえよ！

安田 A ハ…ホー。

安田 B …。

安田 A へへ。

安田 B へへじゃねえよ。ホラ言ってみろ、「オマエ」。

安田 A オ…「オマエ」。

安田 B もう一回。

安田 A 「オマエ」。

安田 B 「オマエ」。

安田 A 「オマエ」。

安田 B コノヤロー。

安田 A コノヤロー。

安田 B バツキヤロー！

安田 A バツキヤロー！

安田 B 出しやがれこんちくしょう！

安田 A だしやがれー。

安田 A、安田 B、わめきちらして暴れる。
やがて疲れて荒い息。

安田 B …こんなことやってる場合じゃねえ…このままじゃ千鶴子様が…。

安田 A あー、そのヤクザの金は、銀行の口座にはいってるんですよ。

安田 B そーだよ！ その語尾やめろって！ その金さえやつらに返せりゃ…女王様を助けられるのに…。

安田 A …その銀行、自動預金機使ってますよね…使ってるよね。

安田 B 使ってるよ！ オレだってカードもってるんだよ。でもオレの口座にや、602円しか残ってねえんだよ！

安田 A …とれるよ。

安田 B 何が。

安田 A そのヤクザの口座の一億四千万、そっくりあなたの口座に送金するんだ。同時にもう一人がいてその金を引き出す。

安田 B どうやってそんなことすんだよ…。

安田 A 銀行のコンピューターセンターと支店をつないでる回線を見つけたして、そこに二セの送金データをながすんだ。

安田 B …そんなことできるのか、おまえ。

安田 A まだやったことないけど。原理的にはできるはずだよ。

安田 B それ、やるのにどれくらいかかるんだ。

安田 A 二日もあれば…ただ問題が二つある。

安田 B なんだよ。

安田 A まずここから出れなきゃどうにもならない。もうひとつは、これが…この指じゃ、ワイヤートラップの細かい細工はできない。

安田 B …俺がやる。

安田 A わかった…じゃ、やり方を教えるから。

安田 B 後はどうやってこっから出るかだ…

安田 A …なんとかするよ。

安田 B なんとかかって…なんか策があんのかよ。

安田 A Aシステムのコピーテープと引き換えにするんだ。…いこう。

安田 A、安田 B、退場。

大学。日浦研究室。

日浦、松本、登場。

松本 あの、これ、今日のです。

日浦 ごくろうさま。…これ、バイト代。

松本 ありがとうございます！ じゃ、失礼します。

松本、退場。

日浦 (訳されたメッセージを読む)…「忠告聞かずに、すみません。最後にします。病院の子供が、一生、生きて居られるようにお金をもってきます。そしたら、自由になったら、南の島にいきましょう。安田健太。…」

…バカな子。
…いいわよ。南の島、いきましょう。
…

日浦、退場。

二つのエリア。指令を出す安田 A は座っている。
帽子を目深にかぶった安田 B、電話ボックスへ入る。

安田 A …銀行のビルの四階に、あまり使われていない電話ボックスがある。そこに入ったらまず、電話ボックスの裏板をはずす。ビルの電話回線のメインケーブルが見えるはずだ。一本一本に、ラジオのアンテナを接触させていけ。ラジオから連続した調子の雑音が一段と高く出る一本を見つけたら、それが銀行のコンピュータセンターとつながっているデータ通信回線だ。その音を一定時間、ラジオカセに録音してくれ。その音から、銀行の送金データがどんな形で伝送されているかを割り出す。ナゾ解きは俺にまかせろ。一晩あればどんな暗号だって解いてやる。解読がすんだら、根小田の口座からこの…(通帳をかざす)あんたの口座宛に、一億四千万円が振り込まれたという偽のデータを作る。それを通信回線にもぐり込ませればすべて完了だ。…回線にマジックで印をつけておいてくれ。…よし。あとは明日だ…。

安田 A・B、退場。

黒崎邸。

黒崎、伊藤、学部長、登場。

学部長 確かにこのテープにコピーがはいっていると言ったんですが、その安田って子は。

黒崎 そうだ。それを引き渡すかわりに見逃してくれとぬかしよったので、一旦逃がしてやった。ま、つまえる気になればいつでもできる。どうだ、間違いないか。

学部長 ま、確かにある種のデータではありますが…聞いてみますか？…当麻くん。
 当麻、登場。テープを受取り、引っ込む。
 当麻、再登場。
 曲がかかる。(ファンキーモンキーベイビーズ キャロル)

黒崎 …これはなんだ。

学部長 さあ。洋楽にはうといもので。

黒崎 伊藤。

伊藤 ハイ。

黒崎 おまえはどうだ。

伊藤 …うといもので。

黒崎 つまりどうということだ。

学部長 ニセのテープということでしょう。

黒崎 伊藤。

伊藤 ハイ。

黒崎 安田健太を殺れ。

伊藤 ハッ。…あの、どっちの…。

黒崎 どいつもこいつも全部だ！

伊藤 わっかりましたア！

伊藤、すつとんで退場。

黒崎、退場。

日浦、登場。

当麻 …日浦先生…！

日浦 あの子を殺しにくいのね。

学部長 日浦くん。

日浦 ダメよ。もう殺させない。…一度と殺させないわ。

日浦、退場。

当麻、追って退場。

学部長、退場。

安田B、登場。

二つのエリア。

安田B、再び電話ボックスへ入る。

安田A …昨日、印をつけた線をみつけたら、十センチばかり離れた二ヶ所の被覆をはぎとり、その間を別の電線で結んで迂回路を作る。…次にその間を切断、そこにターミナルを接続する。そうしたら迂回路をはずす。ターミナルを動かす。…落ち着いてやれ。時間はある。教えたとおり、間違わずに、操作するんだ。…いいぞ、大成功だ。…配線をもとに戻したら、ゆっゆっ、胸を張って出ていけ。

安田B、退場。

安田 A …よし、やったぞ。…あばよ、安田健太。
金は俺がいただいた。

安田 A、さっと椅子から立ち上がって退場。
伊藤、かけこんで登場。

伊藤 チツ。…安田ア！ おどれ、どこいきやがった！

日浦、登場。

日浦 安田健太！…健太！

伊藤 なんじゃ、このババア！ のかんかい！

安田 A、別の場所（銀行）に登場。

日浦、伊藤にしがみつく。

伊藤、振り払って蹴りつける。

伊藤 ひっこんどれ、ババア！

伊藤、退場。

日浦、咳こんで苦しみ始める。

安田 A、銀行の窓口に呼び出される。

安田 A …安田健太です。

安田 A、札束を次々とバッグにつめる。

安田 A 一億四千万…。確かに。

安田 A、退場。

日浦 …健一…

日浦、息絶える。

安田を探す伊藤、登場。

目木、登場。背後からナイフで伊藤に切りかかる。

伊藤 …！…おのれ…

ドスを抜いて、目木に身体ごとぶつかる。

目木 ぐ…。

目木、その場に倒れる。

手傷の伊藤、よろよろと登場。

サイレンの音。
暗転。

ACT 6

安田Aの部屋。
学部長、安田A。

学部長 …じゃ、本当にコピーはとってないんだな。
安田A …。

学部長 今日は伊藤の裁判の初日だ。求刑は殺人罪で終身刑。ま、どんなにがんばっても二十年は固いだろう。…黒崎のほうは私が何とか押える。安心したまえ。

安田A …病院の…機械のなかにいる、日浦さんの子供は…、どうなるんでしょうか。

学部長 その子はもつ十四年前に死んでる。

安田A …そんな…

学部長 精神の失調を理由に離婚が成立したとき、彼女の夫だった男が機械の電源を切る書類にサインした。法律的にはそれで充分だった。

安田A でも、あの人は…

学部長 知っていたのか、思い込んでいたのか…。彼女はこの十四年間一度も病院には行かなかったが…

安田A …。

学部長、安田Aに小切手を渡す。

学部長 これは彼女が息子のために十四年間送り続けた金の全額だ。君が受け取れ。

安田A …なんで…

学部長 俺が君の後見人になってやる。その金でコンピュータの会社をつくるんだ。君なら業界のトップにたてる。

安田A …でも…

学部長 いいな。俺の目が黒いうちは君には手を出させん。…機械のなかから出てこい。世間にな。

学部長、退場。

別の場所。千鶴子、安田B、登場。
安田A、退場。

千鶴子 …いろいろ、どうも。

安田B 千鶴子様…本当に行くんですか。

千鶴子 はい。

安田B かえって来ないんですか、もつ、この町には。

千鶴子 分かりません。でも、どうか待たないでください。

安田B …。

さなえ、登場。

千鶴子 …それじゃ…。あの、これ。(ムチを渡す)

安田B え、これは…。

千鶴子 差し上げます。もつ、使いませんから…。それ、死んだ夫のかたみなんです。

夫はサーカスで猛獣使いをしておりました。

安田 B 千鶴子様…。

千鶴子 それじゃ。お元気で。

安田 B 千鶴子様…。

千鶴子、さなえ、退場。

安田 B 千鶴子！

安田 B、退場。

さなえ、登場。

千満、登場。

さなえ 目木先生。見送りにも来てくれないなんて…先生のバカ！（千満に気付いて）…

婆ちゃん。お別れだね。

千満 アイ。

さなえ 婆ちゃんあたしのたつたひとりのともだちだったのに。もう会えないのかな。

千満 あのふたり以外で私の姿が見えたのはさなえちゃん、あんなだけさ。だからその気になればさなえちゃんが会いたいときに会えるさ。

さなえ 会いたいときに？

千満 そう。でもね、人は年をとったり、出るものがなくなったり、貯金が増えたり、いろんな理由で魂の向きがちょっとだけ変わっちゃった時に、もうわたしの姿がみえなくなる。だからさなえちゃんも、もしそうなくてもがっかりすることはない。いいね。

さなえ …。（うなづく）

千満 おかさんをたいせつにするんだよ。

さなえ ありがとう。千満はあちゃん。

さなえ、退場。

千満 …さなえちゃんもいつか年老いて死ぬときが来る。そのとき、さなえちゃんは夢を見る。それは一瞬のうちに、長い長い夢を見る。さなえちゃんが生れて死ぬまでの、まるでパラマのような夢を。その夢を見守るのがあたしの役目。あんたがその夢を見終ったら、あたしがあんたを連れていく。…いいね、だから…あれえっ、さなえちゃん、さなえちゃん、やれやれ、せっかちな子だよ、まったく…それにしてもあのふたり、あと二十年足らずってどこかねえ…まったくこんなことは初めてだよ。どつちを連れていっていいやらわからなくなってしまうってまあ、難儀なことだよ。

…あのふたり、かたやコンピューター会社の社長。かたや一億四千万で買い取ったSMクラブを中心に、大風俗チェーンのオーナー。それぞれに出世をするんだけど、出会いの仕方が尾を引いてか、ことあるごとにぶつかりあい、いがみあい…

両袖に安田 A、安田 B が登場する。電話している。
二十年後である。

安田 A どつするつもりなんだ。

安田 B なにがだ。

安田 A しらばつくれるなよ。伊藤が出所してきたんだぞ！ そっちにも連絡がいったはずだ。

安田 B …ああ。さっそくおどしの電話をつけたよ。

安田 A 去年の暮、飛田林学部長が死んで、俺のほうは黒崎の圧力をモロに受けてる。もう限界なんだ。…金だよ。伊藤に金を積まなきゃ、俺達は共倒れだ。おまえとは長い付き合いだ。頼む。用立ててくれ。

安田 B 俺のほうはな、飛田林の息子だよ。あいつが市長になったのは知ってるだろ。後ろには黒崎がいる。俺の方だって火の車なんだよ。とても無理だ。

安田 A 安田。

安田 B なんだ。

安田 A おまえ、保険かけてるな。

安田 B なんのことだ。

安田 A …俺に考えがある。

雷鳴。近づく雨音。

松本、登場。

松本 うわ。けっこう本降りになってきやがったな…。お。ここか？ 間にあった。

松本、部屋に入る。

松本 あのー、アルバイトニュースみてきたんですけど…。

部屋で安田 A、安田 B、振り返る。

雷鳴。

暗転。

そろそろと葬式の参列者、登場。

葬儀屋 それでは故安田健太さんの年来の親友であり、奇しくも故人と同姓同名の、友

人代表、安田健太さんに、お別れの言葉をいただきます。

左右から安田 A、安田 B 登場。

安田 A・B 安田健太です。お亡くなりになられた安田君との出会いは、今をさるること二十年前、彼も私も十八才の時でした。私（彼）はその頃職もなく無りようをここに、彼（私）といえばしがたない印刷会社の平社員でした。そのときの或る出来事が、ふたりの青年をわがちがたく結びつけたのであります…

葬儀がつづく中、千満、駆込んで登場。

千満 どういうことよ…ちょっと…これじゃどっちが死んだかわからないじゃない。まってまってまって…

葬儀屋 あ、ちょっとお婆ちゃん、困るな、こんなとこで。

千満 お、おまえさん、わたしがみえるのかい。

葬儀屋 何言ってるの。みんなみてるよ。ほら、こっちきて。

千満 みんな？ ちよつとお待ち。じゃあ、これは誰の夢？（葬列の人々退場していく）一体誰が見てる走馬燈だい？…おまち！ お待ちしたらお待ち！…死んだはずだよ。どっちかが死んだはずなんだよ。ヤクザから騙しとった金、それにあのとき死んだ助教が残したお金を分けあって人生を始め直したふたりの安田健太は、あの嵐の夜、あの夜、確かに毒の水を飲んだはずなんだよ。そして安田健太は、夢を見始めた。この夜の名残りに誰もが見る走馬燈の一幕を。人生最後の幕が降りる寸毫すんこうの間に見る、等身大の夢を。その夢が終ればわたしは彼の魂を天に連れて帰ることができる。それなのに…

葬儀屋 お婆ちゃん。何を一人でぶつぶつ言ってるんですか。もうお葬式は終わりましたよ。

千満 あんた…どうしてわたしの姿がみえる。安田健太の夢はもう終わったはずなのに…

葬儀屋 おばあちゃん、言ってることが変ですよ。夢でも見てるんじゃないんですか。

千満 夢…？ これが夢だというのかい…じゃああんたは…安田健太の人生をいどるたくさんの影どもは…おう…みんなどこに…どこに消えた…？ ここは…一体誰の世界なの？…誰の夢を誰が見ているの…

葬儀屋 …さあね。誰も夢なんか見てませんよ。夢ってのは一人で見るもんなんだから。

千満 あんたは誰…？

葬儀屋 わたしはただの葬儀屋ですよ。生れたときから、家が葬儀屋でね。あまり深く考えずに、高校出て後を継いだんです。初仕事が自分のおやし葬式でしたよ…それ以来ずいぶんたくさんの葬式を見てきましたよ…

千満 …だまされないよ。安田健太の夢が終わればわたしの姿はもうにも見えない…いや、夢が終った時、最後のページをめくり終えた時、全ては終るはずなんだ…影は光のなかに消えていく筈なんだ…

葬儀屋 …。

千満 あんたは…誰。

葬儀屋 わたしはただの葬儀屋です。

千満 誰かが見てるね…この夢を見てるのは誰…？ 誰が幻で誰がうつしみなの…？
葬儀屋 さて、お婆ちゃん、目が覚めるまであとまだ三十年あります。長生きしたもんですね。

千満 嘘だ！…嘘…。夢だ…これは…夢…

暗転。

松本、登場。

松本 さあさ、みなさん。帰ってきましたよ。お疲れ様でした。

そろそろと老人たち登場。

すわりこんで、ガヤガヤ話し出す。

老人となった伊藤、さなえ、千鶴子、飛田林、等。

ひとりの少女が別の場所に登場。
座って本を読み出す。

松本
ふう。(電話ボックスへ、電話をかける。少女、電話を取る) …あ、もしもし、バ
イトおわった! … うん、例の老人ホームのハトバスツアー。…うん、これから
いくよ。待ってな。…じゃあ!

切る少女と松本。

松本退場。

少女、やがてパタリと本を閉じる。
車座になってガヤガヤしていた老人たちは、本の閉じられる音とともにヒタリと動
きを止める。

松本、少女のいる場所に登場。

ふたり、連れ立って部屋を出ていく。

彫像のように止まったままの老人達を残し、舞台は闇に溶けていく。

音楽とともに、
幕。